

貧困から抜け出す力

— 民主的な人と文化の育成

たとえ多額の援助をしたとしても、立派な建物を建てたとしても、それだけでは持続可能な開発援助は難しいかもしれない。現地の人びとたちが自身が主体的に活動すること。そのことが社会をよりよい方向に変えていく原動力となり、やがては困難を克服することになるだろう。

フィリピンの人びととともに

アクセスー共生社会をめざす地球市民の会は一九八八年に結成され、一九九〇年からフィリピンで貧困削減に取り組んでいる国際協力NGOである。保健衛生、教育支援、生計向上、青年育成などで貧しい人びとの日々のニーズに応えながら、奨学生会・保護者会、ヘルスワーカー、生産者団体などの組織化を通じて住民の集団的エンパワメント（自分たちで協力し合って問題を解決する力を育てること）に力をいれて活動している。なかでも、フェアトレード・プログラムは、商品の生産・販売活動を通じて、貧しい人びとを生産者団体として組織し、互いに協力して貧困から脱け出す力をつけようというものである。

アクセスの特徴は、フィリピン現地法人を組織し、フィリピンの貧しい人びとのエンパワメントをフィリピン人・日本人スタッフが直接おこなっていること、そして日本人に所属する学生を中心とするボランティア支援チームがフィリピンのスタッフや住民と直接協働関係を作り、プログラムの運営に関与していることにある。

シヨップなどに販売網を広げる一方で、年に一〜二回フィリピン現地を訪れ、生産者たちと一緒に商品開発をおこなってきた。

プログラムに参加する住民の多くは女性である。働きたくても仕事が見つからず、主婦をしていた母親がほとんどだ。「以前は、空いた時間はおしゃべりして過ごすしかなかった。今は、家事・育児との両立が大変とはいえ、注文さえあれば、子どもに三食食べさせ、学校に行かせることもできるようになった」と言う。彼女たちが今、何よりも欲しいのは「もっと多くの注文」だ。自分たちの労働によって収入を増やすことができ、自分たちの創意工夫によって収入を増やすことができる。こうした自助努力の成果が収入という具体的な形となってあらわれるため、自尊の気持ちも高くなる。「与えられる」ことを基本とするチャリティーとの最大の違いだろう。

受注の配分、品質管理、商品開発、原材料の調達、国内販路の拡大など、生産・販売のあらゆる部分をフィリピンの生産者自身がおこなおうとしている点も、チャリティーとの大きな違いである。もちろん、日本のフェアトレード事業部に頼っている面もまだまだ少なくないが、少しずつ生産者自身で運営できる分野が広がっている。算数が得意だった女性が会計担当になったり、英語が得意な女性が日本人スタッフとのあいだの連絡担当になったり……と、生かされてこなかった女性たちの能力に活躍の場が与えられるのも、フェアトレード・プログラムの良さといえるだろう。

ココナッツ雑貨が、女性たちの暮らしを変える

プロジェクト地のひとつケソン州アラバット島ペレーズ地区で、ココナッツの殻を使った雑貨やアクセサリを生産している生産者団体マパヤパとアクセス日本のフェアトレード事業部を例にとろう。一九九九年、アクセスが主催するスタディツアーに立命館大学の学生二人が参加した。この学生たちは、もともとフェアトレードに関心をもっていたため、椰子の木が生い茂るアラバット島の様子を見て、ヤシ殻を使った商品を生産すれば日本で売れると考え、ツアー終了後企画書を作成し、アクセスのフェアトレード事業を立ち上げることを提案した。翌年大学を休学し、六月から二月までフィリピンに滞在した二人は、ペレーズ地区に住み込み、アクセスのフィリピン人スタッフのサポートを受けながら、住民アンケート、商品規格の作成、生産者の募集、生産者のトレーニング、商品買い取り価格の設定、生産者団体の規則作り、などをおこなった。その後、二人はフェアトレード事業部を立ち上げ、学生ボランティアアスタップとともに、大学生協やフェアトレード

「ボス一家の家族経営」を越えるものを

むろん、良いことばかりではなく、克服すべき課題は多い。第一に、受益者たちが自ら組織を作り運営するためには、意思決定のしくみ、決定事項の遂行のしくみ、会計など資産管理のしくみなど、組織運営に関する最低限の知識と技能が必要だ。そして、これが容易なことではない。まず、単純に事務作業に慣れていない人が多い。教育を受ける機会を奪われ、事務作業を必要とする仕事につく機会を逃してきたことの結果である。

だが、何よりの課題は組織の内部で民主主義をいかに実践するかということである。生産者団体が成長し何がしかの収入をえられるようになる、内部にボスの人物が形成される。多くの場合リーダーシップがあり献身的に活動をおこなう人物なので、組織作りにおいては大切な存在だ。ただ、日々生きぬくこと自体が大変な貧しい人びとのあいだではとりわけ、ボスになることは自己の利益の確保と直結する。これとフィリピン社会に深く広く浸透している家族中心主義が結び付き、いつの間にかボスの家族を中心に組織が運営されるようになるケースが多いのである。実際、アクセスは過去この問題で手ひどい失敗を経験したことがある。

わたしたちがフェアトレードをおこなう際にめざすのは、ボス一家の家族経営的組織ではなく、「より貧しい人びとにチャンスを提供し、家族関係を越えた地域住民の助け合いが民主的におこなわれる協同組合として生産者団体を育てる」ということだ。民主主義的な人と文化の育成という、難しいがやりがいのある課題に挑戦しようとしているのである。



現在、生産者は7名だが、拡大をめざしている



熱心に生産に取り組む女性たち



現地スタッフと真剣に議論する生産者たち



デザイン開発や販売をおこなうボランティア



2000年当時、フェアトレード事業立ち上げにかかった学生2名と現地住民



ココナッツ殻製の石鹸置き

野田 沙良

特定非営利活動法人アクセス
— 共生社会をめざす地球市民の会 事務局長